

レッシングと合理的精神

加藤 正

—

歴史は繰り返すものとするならば、古代世界に対してソークラテースの行ったところのことを、近代世界に対してレッシングが行ったといえよう。ソークラテースが、自らギリシャ啓蒙思想家の一人であるかに見えてしかもその啓蒙思想を克服し、プラトン・アリストテレスをめぐるギリシャ精神の古典時代を開いた、恰もそれと同じように、レッシングは近代社会の啓蒙思想から出でてそれを克服し、ドイツ精神の古典時代を開いたのであるが、この古典ドイツ精神こそは、現代において思想し感受するあらゆる人間精神の生ける命脈を掘り起こし、意識するしないに拘らず、人間精神の自己正視が到らざるを得ない一つの頂点を成すものである。謂わば人間の精神の鏡面なのである。トオマス・マンはレッシングの特質を描くために、「古典的」なる言葉から、学校の公定性とお手本性の意味を奪って、生活の端緒の基礎づけ、後代が自己を常にその中に再認識し且つその足跡に従って進む「族長的刻印をもった原型」の意味を与えた^①。即ちレッシングは吾人の生活的結合の端緒を開き、その先頭に立つ古典的個性であったのだ。——言うまでもなく、マンはこの場合ドイツの国家生活の結合の開拓者としてのレッシングについて語ったのであるが、ソークラテースが単にギリシャにとつての古典的個性ではないと同様に、否それ以上に、レッシングも亦、単に（若くは、決して）ドイツの古典思想家ではなく、人類生活の結合の端緒を開き、人類種属の族

長的刻印をもって現われた古典的個性なのである。

マンは古典的なるものを右の如く限定して、それをミュートス（神話）的なるものと呼んだ。だが歴史と伝統とを自己の中に代表する族長としてミュートスの中に形態を与えられたような個性では、レッシングはなかつた。歴史と伝統の中に芽ぐみ乍ら、しかも常にそれを越えて生長してゆく生活、ミュートスの中に自己を啓示し乍ら、しかも絶えずそのミュートスの衣を脱いで、自分の自立的な現実の姿を開展してゆく生活、そういう生活を自覚した古典的個性がレッシングであつた。こういう生活、こういう人間結合を開示し、基礎づけ、準備し、形象化したところに、彼の古典性は光輝を放っている。かかる古典的個性は、もはや族長としては現われず、ミュートスとしては歩まない。それは、族長に率いられミュートスの形成の中を導かれているかに見える生活を透してその背後から顕現して来る人間結合の真の根底を、弁別しては取出だし、それを人々の自覚にもたらさんとする徹底的な論究者として現われ、そのことによつて絶えずミュートスの世界を乗り越して停止するところを知らない徹底的な合理的精神として現われる。

合理的精神については、一つの誤られたる伝説がある。合理的精神は分別する精神であり、弁証する精神であり、論理的精神である。従つて、——と伝説はいう——合理的精神は抽象的で、血と生命のない形式で、生きた肉体の形象を欠いている。この伝説によつて人々は合理的なるものよりも一層高いものを求めようとする。かくしてトーマス・マンはレッシングが創造したものを、一つのミュートス的な典型と呼んだ。ミュートスとは常に新しく肉体となつて歩むものであり、後代が常に自己をその中に再認識する一つの型である、と。そしてそこから、彼にはレッシングの精神が分らなくなつてゐる。何となれば、そのミュートスの中に内在し、ミュートスを衝いて展開する「在るもの」、ミュートスの襦袢の中で育ち乍ら、それを脱いで成長する「それ自らにおいてあるもの」、これにかかるものとして限定し、その生命ある形象を判別して取上げることこそ、レッシングの合理的精神であつたから。

実在の眞の血と生命は、この精神の下においてのみ、せんめい闡明される。ここにおいては分別する精神は形成する精神との統一において現われる。

なるほど成程、生ける実在から隔絶した生命のない合理的精神もあつた。「それ自らにおいてある実在」の展開を単にかかるものとして限定する以上のものではないところの論理規定を、逆に、「それ自らにおいてあるもの」として「自然的なるもの」として自立せしめ、過去の歴史と伝統、啓示と神話に対峙せしめた合理的精神がそうであつた。例えば、ギリシャのソピステース達、十八世紀の啓蒙主義者達においての様に。しかし乍ら、なが血と生命をもつものは、過去の歴史でも伝統でもなければ、また啓示でも神話でもない。彼等が偏狭な立場に陥つたのは、これらのものに対立したからではなくして、これらに対立することにより、これらの定型に内在して成長しつつあるところの眞に生命ある実在に対立することとなつたからである。啓示、神話、伝統、これらは眞なる実在の最初の開現形態である。何ものもが啓示されないとするには、理性もまた啓示されない、いかなる伝統も存しないところには、新しい現実も展開しない。そして、偏狭な合理主義は啓示や神話や伝統をその非合理的な定型の故に抹殺しようとするとき、眞なる実在の展開の道を塞ぐのである。ここに、啓蒙主義的理性は止揚され、しよレッシングが、近代社会のソークラテースとして来らねばならなかつた。

二

レッシングが近代社会に与えたところの、そして彼を他の近代思想の先駆者から区別するところの精神は、歴史的認識の精神であつた。歴史的認識の本質は、時間的推移の種々相を判別し、その推移段階を考定することにあるのではない。それは更に進んでこの推移の基礎をなし、この推移の中に脈打っている実在を吾々の前に将来することにあるのだ。

実在は——あるときは神と呼ばれ、あるときは自然と呼ばれ、またあるときは物（それ自体）と呼ばれた——一にして全^{περὸν πάντων}である。それは他に対立した一つの限定によって確定し得ない。一つの限定は単に一つの側面である。それは必然に他の限定を予想する。実在は、相^{あい}関連しつつ繰り展べられてゆくあらゆる限定、あらゆる側面を透して自己を現^{あらわ}す。従って実在は、種々の限定、推移の種々相、それらの一つ一つを不可欠の契機として限定するときのみ、より完全に限定される。契機としての諸限定は相互に対立する限定である。しかしこの新しい限定に対しでは、対立でなく、適応である。諸契機相互の対立は新しい限定を喚び起こすべき必然的な対立である。しかしこの新しい限定に対立する契機は、実在に到る契機ではない。逆に、諸契機を自己の中へ克服し得ずして、これと対立するところの限定は、未だ相手と同じ一面性を負わされた限定にすぎないのであって、それ自身新しい解決的な限定を将来すべき単に一つの契機にすぎない。——かかる論理によって、実在をより完全な限定の下に将来せんとする精神こそ真の合理的精神であり、真の歴史的認識の核心をなすものはこの精神である。

実在の発展は、人類の上に常に新しい問題として啓示される。問題は解答を、即ち実在のより完全な限定を導く不可欠の手がかり（契機）である。この問題は人間精神の中で、或いはパトス（感受・情意・熱情）として、或いはロゴス（理知・反省・判別的限定）として、或いはミュートス的なもの、或いは構想、或いはポイエーシスとしての定型をとって進行する。これらは、そのものとしては啓示の形式にすぎず、啓示された「問題」または実在の象徴であつて、何の解決でもない。だがこの問題を反省し、問題の中から、問題の背後から、発展し来る実在そのものを取り出して限定するとき、その啓示は理性に止^し揚^{よう}され、その理性において解決される。

このときその理性は実在と一つのものとして現れる。この理性のもとに実在そのものが捉^{とら}えられているのである。理性は実在と一つのものとして現れるところの人間精神である。この理性が他のあらゆる定型に対して自己を主張するとき、それは実在と一つである。しかしながら、実在そのものに対するとき、それもまた一つの定型、人間精

神のロゴスの定型にすぎず、一つの限定、實在の一つの相、一つの判断にすぎない。この反省なしに、理性がどこまでも自己を實在と一つのものとして、即ち自己の展開をそのまま實在の展開として置くとき、その理性は偏狭な合理主義に墮する。

眞の合理的精神は實在そのものを根拠とし、この實在をかかるものとして限定し、弁証せんとする人間精神である。實在は常に新しく限定されることを要求する。だが絶えず更新される限定の進行は、他方においては諸定型の絶えざる自己否定である。人間精神は自己の定型の否定によつてのみ自己の基底にあるところのもの、即ち實在を開き出すことができる。人間精神のこの働きが合理的精神である。それは本質上批判的精神である。

實在は常に人間精神の基底にあるところのものである。それは人間精神の定型をもつてしては限定し得ないものである。それは意志としても、感情としても、論理としても、構想としても限定し得ないものである。實在は、かかるものとしては、ただ人間精神の基底にあるもの、従つて人間精神とは独立に、それ自身としてあるところのものとしてのみ限定し得る。しかも人間精神のあらゆる定型の中に開き出されて来る故に、それを介して反省的に限定し得るのであり、どこまでも豊富に開き出されて来る故に、どこまでも精確に具象的に限定を進めてゆくことができるのである。

限定と限定、定型と定型は、対立であり、相剋である。だが様々の定型の中に内在し、その中から開き出されて来るものは、相合致する一つの實在である。限定において多様なものも、この限定の止揚しやうにおいて一つの實在に歩み寄る。最初の開現形態としての啓示、そのミュートの定型を止揚しやうして、實在するものの自立的な姿を開き出さんとする合理精神は、定型を定型として維持せんとするあらゆる宗派や世界観と決定的な闘争を遂行せねばならない。レッシングは屢々しばしば宗派の和平、人類一般の和平を説いた思想家と考えられている。成程なるほどレッシングは、反対の立場から同じ誤謬と偏狭に陥りつつ反目を続ける党派や宗派や排外主義の、いずれの側の偏見をも一律に嘲笑し

た。しかし、宗派と宗派、世界観と世界観との間に和平はあり得ない。和平はただ、それらの基底を流れる実在の同一性を捉え、それによって実在を新しく限定しながら、それらの定型を内から押し破るときにのみ現われる。これはそれ自身また一つの精力的な闘争でなくてはならぬ。合理的精神は常に闘争的批判的精神である。合理的精神の本性はあらゆる定型の間に調和を設定することではない。定型そのものの克服によって、その下にある普遍的な基礎を開き出すことである。

いうまでもなく、かかる普遍的な基礎もまた、一にして全なる実在に対して置かれるときは、その単に一つの限定、普遍的ではなく特殊な一つの定型にすぎない。人類の精神は一方において古い相剋を克服し、平和的結合、同一的合致の基礎を開いて行くと同時に、新たな相剋をも開き出す。だが人類の新しい結合の基礎を遙か彼方の地平線上のかすかな一点として望みながら、それを開き出すために果敢な闘争を遂行しつつあるときのレッシングにとつては、それが開き出され将来せしめられる道程において如何なる相剋に陥り、自らを喪失し、再び新たな限定の下に再発見されねばならなかったかの問題は問題たり得る理由がなかった。これはその後において、ドイツ古典哲学およびそれ以降の発展について吾々の如実に経験したところであった。従つてレッシングが念頭に描きつつその実現のために闘った人間結合の形態は、いきおい普遍的たるとともに抽象的たらざるを得なかった。しかし、抽象的普遍的事であることが合理的なのではない。実在の古い限定を転換して、新しい限定を将来すべき蝶番的限定であるということ、実在のより完全な姿がそこから開き出される端緒をなす限定であるということが、合理的なのである。

三

レッシングは屢々ルツタアと対比される。ハインリッヒ・ハイネはその『ドイツの宗教と哲学の歴史について』

(二八三四)の中で書いている。「ルツタア以来ドイツはレッシング以上に偉大な優れた人物を生まなかった。この二人は吾々の誇りであり、吾々の歎びである。現在の意気消沈の中から吾々が彼等の慰安の像を仰ぎ見るとき、彼等は輝かしい約束の合図を送る。然り、やがて、ルツタアが始め、レッシングが継いだ事業を完成する第三の人も来るだろう。第三の解放者！ ドイツはこの人を翹望している。『東天紅から太陽の輝き出つるが如く』帝王の紅の外衣の裡から輝き出つる金色の甲冑を、早くも私は見る。」

レッシングが継続したものは、信仰のみが人を義となし、ただ聖書のみ拠りどころであるという、宗教改革の根底となったルツタアの説教ではなかった。否、逆に、ルツタアの精神をかかると定型においてのみ維持して、そこから次なる真理へと進んで新しい深い実在的根底を開き出すことを知らなかったものところ、レッシングは最も精神的に戦った。聖書の文字もまた最後のものではない。レッシング自身、ルツタアについてこう叫んでいる。「汝、ルツタアよ！——忘れられた偉大な人よ！ しかも、汝の上靴を手にとって汝の開拓した道を叫びながら、そのくせ何の関心も持たずに、漫然と歩いている近視眼的頑迷者流によつて、何人によつてよりも一層多く忘れられている！——汝は伝統の軛から吾人を解放した。堪え難い文字の軛から吾人を解放するものは誰か！ 今日、汝が説き、キリスト自ら説き給うであろう如き、一つのキリスト教を竟いに吾人にもたらすものは誰か！」

ルツタアの説いたところを継承することではない。彼が今日いたら説くであろうこと、それを説くことによつてルツタアを継承すること、ここに問題がある。ルツタアが人類の拠るべき新しい基礎のために遂行した闘争と同じ闘争を、一層発展した別の基礎の上に遂行すること、この精神こそ、レッシングがルツタアより継承し実現したところのものであり、更にその精神の実在的基礎を立証し、それに古典的限定を与えたところのものなのである。その限定が今に到るも古びることなく、否今こそあらためて新鮮な印象をもつて吾人の心を打つものがあることは、例えば「人類の教育」の一篇を読む人には明かであろう。ヘーゲルがその論理学と歴史哲学とをもつて成し遂げた

ところも、レッシングの視野を出せるものではない。その精神は、真実の存在が一つの定型、一つの伝統、一つのミュートス、一つの傾向の中でひそかに成長しつつあるとき、既にその形象を弁別し、それを健全に育みつつ忍耐強く待つことを知っている。だが、いまや内在する本質が成育を遂げ、自ら歩み始めるとき、その精神は古き定型を維持せんとするいかなる伝統、いかなる権威とも、恐れることなく最後まで闘い抜くことを知っている。その精神は、作られたる歴史とも、作られつつある歴史とも対立しない。それらをばすべて、一層高い実在を引上げ繰り抜くための抜き差しならぬ楨杵こうかんとして捉えるとら。このことによつて、その精神は、自らを歴史を通じて永遠に生き抜く精神に高めたのである。思想的偉人の偉大さは自己の個性の活動においてこの精神を体現している点にある。この精神は絶えず新しい個性の中に花を開く。彼は新しい偉人として、「忘れられたる」偉人、上靴を手に持つて罵りながらうかうかと歩み行く徒輩によつて見逃された偉人の真の精神を継承して、この徒輩と戦うことになる。

次の言葉は記憶に価する、「いかなる権威の前にも停止することなく、いかなる結果をも恐れない。剛直な真理慾——一切の真実な認識と科学的な探究とにとつて今日吾人に不可欠と見えるこの前提——これこそ高潮期におけるルツタアの失われたる遺産であり、かの、ルツタアによつて単に踏み出されたばかりの道を歩み進めることなく、専らその背後に退きながら、ルツタアの継承者だと思ひ違へている一切の人々に抗して、レッシングの再び取り上げ相続したところのものである。勿論もちろん、ルツタアのこの遺産は、その全遺産の一部にしか過ぎない。遺産の他の分もまた再び取り出されねばならぬ。だがこの遺産分を少くともドイツ精神に再び取得せしめたことは、十八世紀においては何者にもあらぬレッシングの功績である。」⁴

一八三四年に、ハイネはルツタアからレッシングを越えて第三の人の出現を早くも目前に見ている。レッシングが最初の火の手となった生活結合の基礎、かの人間の客観的行動に内在する理性は、一八三一年現世を去つたヘーゲルにおいて開き尽されたかに見えた。が、それと同時にレッシングの精神の核心もそこから消えて行つたのであ

る。何となれば、一七八九年のフランスから萌え出でた自由、平等、友愛の合言葉をもった人類史の新しい段階は、レッシングが因襲と混乱の中から弁証し出だした生活理念を現実化するかに見えた。そして、ヘーゲルが、人類の現実に体験しつつあることを然るがままに限定し、かかる体験を開き出だした人類史的な必然の姿を照明し、かくして自己の弁証法において人類の全活動、歴史の中を生きて来た理性の全展開を体系化したとき、ここに一つのことが為されずして残されたのだ。即ち、いまや、この体系の背後から、体系化を通じて開き出されんとしつつあるより高い実在を把握すること、新しい歴史が現に体験しつつある事柄を解決として見ることなく、その多岐且つ多様な様相を新たな啓示と見て、その啓示の中から新しい真理の実在を弁証すること、これである。人類の実践と体験との理性的占有をそこまで拈げ、おしつめ、転化せしめることなくして、どこにレッシングの精神があろうぞ。レッシングの精神は、彼が闡明せんとしたところのものにあるのではない。彼が闡明せんとしたその活動の中にあるのである。レッシングの靴を手持って慢然と歩む欣慕者達は現在に到るまで、人間の理性的合理的結合についてのレッシングの形象化したところを後生大事に理想を描きながら、歴史の絶えず新しく提示する啓示を解いて理性的結合のより深い基礎を弁証する、その合理的精神を「忘れている。」——次の言葉こそレッシングの本質の吐露であつたのだということを忘れている。「ある人間が所有している若くは所有している様に思っている真理ではなく、真理を発見するために払った真率な努力こそ、その人間の価値を成す。何となれば真理の所有によつてでなく、真理の追求によつてのみ、その人間の力は拡大され、またそこにおいてのみその人間の完全さの不断の成長があるから。所有は人を安穩、怠惰、高慢にする——もし神がその右手に一切真理を、その左手にただ一つ、真理への常に息むことなき衝動を、剩あまつせえ私が常に且つ永久に迷うであろうという追加と共に載せて差し出だし、私に向つて、『選べ！』と言えば、——私は謙遜にその左手を選び、『父よ、許し給へ！ 純粹な真理はただ汝独りのものなれば。』と言つてであらう。」

レッシングが着手したところをヘーゲルがある意味において完成した。そして、そのことは不可避的に一つの新しい実在、新しい真理が、これを機縁として喚び起こされ、限定されることを要求した。第三の人が出でねばならぬ。彼は、ヘーゲルの弁証法、その理性の体系、それを一つの啓示、一つの象徴と見て、より深い合理的根底を開き出さねばならぬ。ヘーゲルの神秘的定型の下から合理的核心の掘り起こされるところ、そこに再びレッシングの精神は更生する。即ち、ミュートス化されたあらゆる定型を、それが止揚さるべき側面より捉え、それを止揚すべき基礎に立ち、いかなる力によっても畏服せしめられず何物にも囚われず、何物をも懸念せず、いかなる結論にもたじろがない批判的精神が。——だが、カール・マルクスをもつて第三の人に擬することが当を得ているにしろないにしろ、彼を真理として所有することは、彼の真精神を継承する所以ではない。世界史の中にレッシングの精神が生きている限り、やがて第四の人が出るであろう。だがマルクスの上靴を手を持って、彼の開拓した道を叫びながら、そのくせ別に深い関心もなく、漫然と歩む人々は、その出現を悟らないであろう。まして憑かれた予言や偏狭な排他精神の中に自己の立場を持つ人々は、その第四の人について何事をも考えることはできないであろう。しかし、現代のあらゆる啓示の中から真実の合理的核心を展開すべき第四の人は必ずや出るであろう。

だが、誰をもつてこの第三の人に擬するかは、好事家の穿鑿に委ねて置けばよい。第三の人の上靴を手を持って罵りながら行きたい人は、行くに任せて置くがよい。——吾々は、いま、啓示の時代を経過しつつ、遙か彼方の地平線に、理性のかすかな反映を見ているのである。この理性的なるものを、何物にも恐れることなく、残る隈なく開き出だし、吾々の眼前に提示する人をこそ、吾々のすべては、現代の吾々のレッシングとして要望しているのである。

四

第三の人に誰を擬えようと、それは吾々の関知するところではない。しかし、それがニイチエでないことだけは確かである。特にこれをいうのは、レッシングをもって『ルツタアとニイチエとの間に立つ最大の新教徒』となす前述のトーマス・マンがいるからである。これは、一方ではルツタアからレッシングへの発展の根底をなす歴史の脈絡に対する盲目から出で、他方では合理的批判的精神の本質に対する盲目から出ている。

その『高潮期における』ルツターは何をなしたか。一五一七年十月三十一日における九十五箇條の抗議書に始まり、翌々年ライプチヒにおけるエックとの討論において彼は自己の態度を確立した。エックが貴下はかのフスと同一の根拠によって法皇の最高絶対権を否認せんとするものだと言及したとき、彼は敢然と逆襲した——宗教会議によって宣告を受けたこの異端者の所説にこそ、真に福音的なるものがある、宗教会議といえども過誤なきを得ないと。翌二十年には「ドイツ国民のキリスト者貴族に与う」を草して、世俗的権力を法皇教会の権力に対して戦わしむる進軍のラツパを吹いた。

教会権は封建社会の指標である。ローマン・カトリック的定型の下に与えられていた封建社会の連繫は、その根底から成長しつつあった新しい社会の圧力によって、ゆるめられ、ゆがめられ、解きほどこかれようとしていた。新しい社会に新しい定型を与えるために、この伝統と権威をもった教会権に批判が加えられねばならなかった。まず第一に、法皇と宗教会議の権威、教会の伝統が、それ自身の根底の上で——即ちキリスト教として、吟味されねばならなかった。伝統と権威が正しい判断の基礎ではない。それらは逆に正しい基礎、聖書と万人自明の理由とに拠って批判されねばならない。この批判を行うものは教会権を支えている僧職階級ではない。逆に教会権こそ、聖書を理解し信仰に生きる俗界の階級の手によって批判し、その政府によって克服されねばならない。法皇なるが故に、或いは法皇のみその地位によって、聖書を正解し得るとなすが如きは笑止である。何人も自己の理性をもって聖書に通ずることができるのである。

ルッターの右の合理的精神は、彼が二十一年四月十八日ヴォルムスの国会において、余は聖書の典拠か事理明白な根拠かによって罪を証せられるに非ずんば、一言たりとも自説を撤回し得ずと、審問者に言い放ったとき、最高潮に達したのであった。

合理的な批判的革新的な精神としてのルッターの生命は以上に尽きる。實在的根底を失いつつあるローマン・カトリック的定型（その下には法皇と教権諸侯と教権領主、ローマ帝権とその一統——保守派諸侯と都市貴族——とが腐敗しつつある）に対し合理的なる支点を対立せしめたとき、この支点は新しい歴史的事実を求めて湧出しつつある根底的な力の総体と一つのものであった。ルッターの主張は各種各様の階級を一つの方向の下に集合せしめる一般的な表現となった。そして聖書を根拠として挙示したことは、権威と伝統とから独立に自己の理性を働かせる機会を一般の民衆に与えた。そして、その下に、下級貴族たる騎士階級と都市市民と、農民と都市の下層住民と、ローマ帝権からの独立主権を欲する一部の諸侯と下級の説教僧と、神秘的禁慾教派と学者的調刺家的著述家と、これら一切が結集した。

こうしてルッター的定型は、ローマン・カトリック的定型に対して置くときは、實在の新しい形成の一般的表示または象徴であつた。しかしながら、ルッター的定型を、今度は、これらの諸々の勢力の相互作用の中から成長する實在に対して置くときは、その「単なる象徴」でしかなかった——という意味は、實在との対応点がある意味で具有しながらも全体としては實在から浮び上つた像でしかなかった。自己を實在に対して反省し、實在の上へ帰つてゆく過程は、象徴の働きならぬ認識の過程である。

ルッター的定型を實在に対して置くとき、それは象徴であり、一つのミュートスではあつたが、認識ではなかつた。自己の背後において、自己の脚下において、如何なる歴史的事実が形成されつつあるかの認識にはルッターは達しなかつた。聖書によって彼は義ただしき行為の基準を信仰即ち各人の内なる自由な（自己責任的な）良心に置くべ

きことを教え、権威と伝統とから独立に自己の理性を働かしむることを教えたが、聖書の中に表現されている平俗簡明な社会関係と社会生活の意識は、そのままでは新しい実在の認識とはなり得なかった。そこからして、諸階級の各々はそれぞれ自己の階級についての認識を持ち始めることによつてルッターの定型の下における寄合世帯から自立して行つた。ルッター自身も象徴の中では『剣をもつて』闘つたが、現実の認識の上では都市の市民の立場と合致し、微温的改良派となり、根本的切開の闘争から中立し、逆に農民とその下層市民的支持者とに対抗しては諸侯の立場にすら同化して行つた——しかも聖書の典拠によつてである。これがヴォルムス国会における彼の宣言の暗い面であつた。即ち、この宣言の約一年後、ヴィツテンベルクに再洗礼派の教会掃蕩が始まつたとき、ルッターは自ら立つてこれを瓦解せしめたことを皮切りに、教会権への果敢な闘争のすべてを裏切り、妥協と譲歩に終始している。ルッターの高潮期は既に過ぎた。だが、歴史は如何なる実在を生まんとしてつたのか。各階級がそれぞれに自己の立場、自己の利害を認識し、各自の定型に向つて戦いを進めたとき、これら諸勢力の錯綜の中から何が生み出されんとしつたのか。既にルッターには、それを認識することはおろか、その象徴たることすらできなくなつていた。だがルッターの与えた衝撃は民衆——農民と都市の下層民（プレベイアー）——をして、ルッター的定型そのものを押破つて前進せしめる槓杆（こうかん）であつた。聖書の文句に拠つてルッターが諸侯の立場を権威化しつたあつたとき、農民らは同じく聖書の文句を手がかりとして自己の認識、自己の生活の指示を作り上げた。例えばかの二五年の農民の十二箇條の要求の如き。「真理と聖書とに基き」、「神と隣人とに對して」義なることを確信するこの要求は、生れ出でんとする歴史的実在に對する温和な分前（わけまえ）の要求であつた。諸侯はそれを阻止し破壊した。この実在において自己の發展を達成し得べき筈の市民は、そのことを認識し得ないで——つまり、農民の要求に歩調を合せて自己の要求を組織し、この実在を招来せんとする実力も勇氣もなく——身をひいて諸侯の背後にかくれた。農民には、プレベイアー即ち都市下層民（没落した職人および徒弟、土地を追われた農民および日傭人）の支持は

あつたが、彼等は単に農民に依存してのみ動き得る力にすぎなかつた。これら諸階層的定型の相互の闘争において勝利者たる地位についたのは諸侯（諸侯国の君主等）であつた。だがこの闘争の根底をなし、この闘争によつて生み出さるべく胎動を続けていた歴史的事実は、分立的な諸侯国の定型の下では、出産せしめられる代りに圧殺されざるを得なかつた。少くも、統一された国民としての實在、その下における市民的生活の自由な伸展と充実——この程度の期待すら遠い夢となつた。このとき、徹底的に諸侯と戦い、新しく生れ出んとする實在の、最先端にまで押しつめられた象徴となつたものは、トーマス・ミュンツァーおよび再洗礼派の諸派であつた。

ミュンツァーは、市民の立場に帰着し、諸侯に迎合し、国民大衆から乖離したルツターを飽くことなく曝露した。このリュグナー（嘘つき）博士、ヴィッテンベルク法皇、「おべっか使いの裏切者」に対して国民大衆に警告した——新しい論理に欺かれるな、神の言葉をもつてする瞞着にだまされるな、と。ミュンツァーは蓋し、民衆の要求を聖書の言葉によつて表現することにおいては稀有の天才であつた。しかし、彼自身の限界は聖書の限界を越えていた。彼の前には聖書も権威でなかつた。本来の生ける啓示は聖書に非ずして理性そのものである。理性は啓示の核心であり、すべての人々、すべての国民の中に生きている啓示である。聖書をもつて理性を阻むことは、文字をもつて聖書の精神を殺すものである。啓示は人間における理性の成長である。何人といえども理性をもつものは信仰をもつ。神の国は理性によつて、人間の間に、この地上に、打立てらるべきものである。彼は十二世紀の終に、フローレのヨアヒムの説いた第三の国、聖霊の代、即ち理性の国が、いまこそ来るべきものと考えた。再洗礼派も同様に聖霊即ち理性の啓示によつて聖書も僧職もなき新しい神の国を築かんとしたが、これこの派が一切の教会制度とともに未だ理性なき幼児の洗礼をも否認せんとした真意であつた。そして、ミュンツァー等が理性の前に一切の權威を認めず、定型の權威化に対立して、何ものをも恐れることなく一切の種類の聖別、一切の限定、一切の区分一切の差別を内から押破つて前進せんとする、その理想は、社会の最下層から突上げて来るところのプレバイアー

および農民の力と契合し、いかなる権威の前にも停止せず、いかなる結果をも恐れない前進をその力に与える嚮導者となった。しかし、この力をもって現実に自己の理想を生み出だす条件は当時にあつてはなかつたのである。農民戦争の終結と前後して理性も死んだ。ドイツはその後永く諸々の君侯の下に、諸侯国の下に、疲弊し尽していた。ドイツの生活は二百年の後に到つて再び新しい胎動を感じ始めた。だがそんなことが諸君侯にとつて何であつたか。かのフリードリヒ大王すら徹頭徹尾独裁的に振舞い、自己の人民の国民的市民的訓育の如きは捨てて顧みなかつた。ルッター教会は既にその創始者のときから理性と絶縁していた。新しいドイツの胎動から乖離したかういふ外皮を剥いで、生まれ出でんとする新しい実在の動きに即してドイツの自覚を高め、国民を教育し、この実在に相応しい定型を創造せんとすることがドイツ古典哲学と古典文学の課題となつた。そしてここに、謂わば、未解決のままに（即ち単なる象徴として）残つたミュンツァーが再び取上げられ、解決の道、認識の道に上せられはじめたのであつた。

まず聖書の権威が打破られねばならない。レッシングが戦士として登場した。例えば次の如き命題を見ると、吾々は教会権に対して戦つた「ドイツ国民のキリスト者貴族に与う」におけるルッターを想い起こす——曰く、文学は精神ではない、聖書はキリスト教ではない。曰く、聖書のないときにもこの宗教はあつた。曰く、この宗教は福音書記者や使徒が教えたが故に真なるのではなく、真なるが故に教えたのである。曰く、その宗教の内的真理から記録伝承は説明されねばならぬ、しかも、もし宗教にその内的真理なきときは、すべての記録伝承をもつてしてもそれを与えることはできぬ。——内的真理とは理性である。すべての定型、すべての限定されたものの根底に動いている実在の相である。宗教の内的真理は、啓示の根底をなす神（しかもこれは彼にあつては「実在の全体」に外ならない）の認識であり、理性である。こうしてレッシングは、宗教という定型そのものを越えて、理性の中に住んだ——という意味は実在するものを実在するがままに、それ自身の関係において独立に通用せしめることであ

り、外的な定型に囚われて本来の関係を歪曲せしめないということである。レッシングは人間の理性的な関係——いかなる天上的・地上的な権威と囚襲にもよらざる人間それ自身の結合——を人間生活の支配的関係として提示するために巨匠の腕を振った。或いはパンフレットをもつて、或いは民衆の新しい説教壇たる舞台によつて。二つの卓越した論究、「人類の教育」と「エルンストとファルク」とに見よ。三つの不滅の戯曲、「ミンナ・フォン・バルンヘルム」と「エミーリア・ガロツティ」と「賢人ナータン」とに見よ。

レッシングはこれらの戯曲において彼の時代の生活、その中に生きていた様々の性格の精確な描写を与えた。だが、それだけではない。その中から脈打つ新しい生命を開いて見せたのである。しかし、シツラーにおけると異り、レッシングにおいてはいかなる不分明なパトスもなければ、予言者的の曖昧な誇張もない。蓋し、彼の時代の底を動きつつ出口を求めていた實在の姿が開き出されるとき、他の諸々の形象はそれに対していまや脱ぎ去られた外被としてその裏面から残る隈なく見とおされ限定され尽すものである。「ミンナ」において、猜疑反目に対する友情と愛情、信頼と忠実、無性格な去就に対する性格の誇り。「エミーリア」において、享樂と恣意、権謀と打算に対する義務と責任、敬虔と従順（理性を生かすための自己否定）。「ナータン」において、偏狭と排他に対する寛容と隣人愛。これらの人間関係は当時の生活の中に形を成しつつある實在の表現であった。従つてレッシングにおいてはこれらの徳性は、何等先験的範疇ではなく、永久真理の概念ではない。まして況んや行為の律法などではない。ルツターは律法の根底から信仰を開き出したが、レッシングは更にその信仰の根底から理性を開き出した。彼においては、徳性は、時代のあらゆる権威や伝習や囚襲がその前にいかんともなし得ずして引下らねばならない不可抗の根源的な力だったのである。人間の實在の相、その必然性だったのである。彼が「人類の教育」において「徳を徳それ自身のために遂行」すべき発展段階を提示したのは、人類が他の何ものをも顧慮することなく、専ら理性に従つて、即ち實在の認識に従い、必然性に従つて自己の共同体を立直して行くべきことを意味したのであった。

だがレッシングにとつてはどこまでも越えることのできない限界があつた。それは彼自身も意識していた時代の限界であり、歴史の限界である。彼が限定しようとした当の実在はどこまでもまだ時代の底にあつて前面に出て来ようとはしなかつた。「エルンストとファルク」の対話に言われたように、太陽の上るのを待ちつつ灯火をもやし続けるほかなかつた。そして、「いまこそ時は来た、汝等立て」と呼号する何の理由もなかつた。血を流すことによつて血に価するものを獲得する時期はまだ来ていなかつた。フロレーのヨアヒムもツヴィカウの予言者ミュンツァーも共に陥つた狂信に彼は陥らなかつた。或種の熱狂者とは異り彼の視野の中で行われていた時代の闘争——例えば北アメリカの独立戦争——を彼は待望の日の出と取りちがえることはなかつた。ミュンツァーがミュールハウゼンの町で成立せしめ得たものは彼の理念とは似もつかぬ月足らずの近代市民社会のカリカチャーでしかなかつた。熱狂と激情、血と剣とが問題なのではなくて、それによつて将来さるべき実在を常に見失わぬよう、その実在の立脚地を踏み固めつつ、常にそれを捉えて離さないことが肝要なのである。「血で得たものは血に価しない」とレッシングはエルンストをして言わしめている。しかしながらレッシングは遂に太陽の上ることを予想として確信する。だがそれは歴史の進行の中に実現し行く過程なのだ。理性は各人の個々の努力を通じて歴史の中に漸次に現実化し行く。それは有限の個々人、個々の集群を通じて実現するが、それは個々人、個々集群の上にでなく、ただそれらの相互関係の総体の上にのみ実現する。レッシングが靈魂の流転として提示した思想はこのことに外ならない。靈魂即ち認識即ち理性は、世代から世代へと継承されて展開してゆく。そしてこれは、神または全実在または「一切の限定を越えて在るもの」が、人類の活動の中へ開き出されて行く過程に外ならない。これ、後、ヘーゲルがその論理学の理念論において、生命から生命の増殖を通じて認識への発展として説いた思想である。

レッシングは、自己が立脚する人間的実在を象徴的な言葉で「フライモイレライ」と呼んだ。それは市民社会の根底にあり、市民社会を判定する根拠となり基準となるものである。それは市民的秩序に特有の外的結合に依らず、

「共感的精神の共同的感情」に根ざすものである。歴史的制限はレッシングをして、市民社会即ち人類が生業を立てんとする生活活動の、その根底にあるものを自立的な形で取上げることが得せなかつた。丁度隙間もる太陽の光線を集めて焦点から僅かに焰を作るように、共同共有共通の感情の焰として定型化し得たに過ぎない。この焰は市民社会の事情に応じて、或いは隱微に燃え続け、或いは一面に燃え拡がる。その際レッシングが合理的精神の戦士であつた所以ゆゑんのものは、彼がこの焰を単にパトスとして与えたのではなく、このパトスの定型のものとして市民社会の根底に置いたのではなく、——然しかり、そうした非合理的、主意的、主情的パトス派とは異り、——彼においてその「感情」はそれが象徴する自立的実在とともに意識され、それへの反省において限定されているという点にある。このことは「人類の教育」において、人々が徳を徳そのもののために行う第三の国の背後に、スピノザ流の「二ヘン・カイ・パーンにして全」なる神、即ちもはや人間的定型を脱ぎ去つた自然的な実在を置いていることから明かである。常に人間の精神の根底にあつて、その精神の前に客観的な実在として展開されてゆくところのもの、それに即して自己を限定し得る精神こそ、合理的精神の特質である。——レッシングが「フライモイレライ」と特徴づけたもの、即ち共感的精神の共同感情に包まれた実在は、後に到つて、人類の労働の共同性として闡明せんめいせられた。それは市民社会のあらゆる制度に覆われ歪められてはいてもやはりその根底をなし、やがて市民社会において支配的となることを約束されていることが闡明せんめいせられた。

レッシングは屢々しばしばドイツ市民階級の精神的先驅者といわれる。^⑤しかしながら、以上のように市民社会そのものに対して批判的態度を持したレッシングをかく規定することは困難である。諸君侯下のドイツ生活、宗教改革以来の動乱とその結末としての三十年戦争によつて荒廢に歸したドイツの市民社会において、当時市民階級が、即ち營利に勤勉な商工市民が徐々に実力を蓄えて進出しつつあつたが、レッシングはこの階級の中に早くも首鼠しゅそり兩端りょうたんを持した性格を看取している。彼は当時の市民階級の思想としての啓蒙派の理神論の中途半端を嘲笑した。「困つたこと

に御連中は理性的キリスト教のどこに理性があるのやら、どこにキリスト教があるのやら知らない」で、両者をまぜこぜにしているのだ、と。両者は交互作用にある二つのものであり、理性が開かれるとともに宗教的真理は脱ぎ棄てられるものであるに拘らず、この御連中は両者を一つのものに和解せしめようとしている、と。勿論レッシングの出現は市民階級が荒廃の中から立上つて来るその情勢を表示する現象であった。しかしレッシングはこの階級をそのままに承認したり、その性格を歌ったりはしなかった。彼はその階級の下に外的に展開しつつある市民社会に内なる自覚を与え、その自覚の上に自身を立すべきことを教えた。この自覚は、最後まで徹底せしめられた理性であり、市民社会の活動そのものに限界を附与して、一層高い「フライモイレライ」を開くべき人類史的自覚である。当時の市民階級がたとえその背景に何を蔵していようと、その真面目しんめんもくにおけるレッシングがこの階級のラツパを吹かなかったことだけは確かである。彼の認識は当時の市民社会の発展段階に制約されていた。しかし、当時の市民社会における市民階級の性情には毫も制約されていなかった。彼は、人類思想史上、自らの時代においてその時代の全体性を代表することを能くした数少ない思想家の一人であった。全体性を代表するというのは、まずその時代の社会の相を明確な限定の下に取上げることであり（レッシングにおいてはその戯曲を見よ）、更にその時代に働きてつあるすべての力の限界を措定し、それら諸力の相互関係の下から開き出される実在を弁証し取出ださんとするのである。一言でいえば、合理的精神の貫徹、これである。徹底的に貫かれた理性、即ち時代の与件の底の底までも限定し尽さんとする認識は、いかなる階級、いかなる社会層をも代表するのではなく、時代の全体性を、従つて人類を代表するのである。そしてその時代における何等かの階級や社会集団を代弁することがあるとすれば、それは、それらが時代の権威化された定型を恐れることなく衝いて出で、新しい実在の展開の課題を遂行する限りにおいてなのである。再びそれらが他の定型をとつて自己を権威化し始める限りにおいては——つまり、底から衝き上げて来る実在と乖離かいりを来たし、血で得たものがその血に価しない定型に墮するならば、理性はそれらと対立する。

まして況いわんや、最初の登場からして首鼠しゅそり兩端りょうたんを持したドイツの市民階級を、レッシングの如き男性的性格がいかにして代表し得ようか。

レッシングの開いた理性、彼の合理的精神がドイツ古典哲学および文学に力強い衝撃を与えたというのは事実である。またその哲学と文学が、レッシングの荒削りのまま抽象的に限定したところに精巧な仕上げをほどこし、新しい豊富な内容を与えたというのも事実である。しかし、それとともに彼の何ものにも譲るところなく、何ものにも曇らされるところのなき合理的精神の中に市民階級の性情が忍び込んで来たのも事実であった。カントの『実践理性批判』はレッシングの戯曲すくの勝れた註釈書とも見ることができ、それとともに市民階級の宗教的信仰が先験的權威を与えられて這入はいつて来ている。ゲーテの俗物根性ほかのドイツ君公の一人ヴァイマルのカール・アウグスト公の下で枢密顧問官を務めさせ、ドイツに対する批判を失わしめ、恵まれた境遇の下に市民的教養を広々と吸収し、広い市民的生活の経験を積み、円熟した市民的個性として自己を展示することに終始せしめた。かの「一にして全」なる実在がそういう世界の中へ没入してしまつたのである。彼が市民社会の俗物根性を嘲笑し軽蔑するところがあつたにしても、それはただその無智や狭少に対する自己の教養と判断の優越の自覚から来ているのであつて、それによつて市民階級そのものの中に追隨を許さない選ばれた特権的地位を定立する以上に出なかつた。シツラーはなるほど成程ドイツの新しい生活の敵としての諸侯に燃える様な闘争のラツパを吹いた。だがその熱情の中に、彼自身が何の熱情であるか、何を戦いとするための熱情であるかを忘れ、その「何」に対する見識を忘れていなかつたであろうか。

『ヴィルヘルム・テル』の中でアッティングハウゼンの男爵をして言わしめた「みんな一つに——一つに——一つになつて」の合言葉は、どこへ波及してゆくのか。彼の憧れの「自由」はどこに実を結ぶのか。彼が「自由」を限定し始めたときには、彼は市民社会の外に立つてそれに白眼を向けていた。彼自身ある友に勧告している——「暫しばらくははじめな無価値な未熟な人生をそのままに放置せよ、明朗平和な理念の世界に止まり、その理念を実生活に導

き入れれることは時の到るを待て。」美的世界が彼には自由への道であつた。彼は美的教養の中で自己の個性の自由を陶冶した、そして高い教養と認識をもった個性の特権として市民階級を軽蔑した。つまり、市民社会の上に実現さるべきものが個人の意識の中に移されたのである。それは現実において十分に伸び得ずにいる市民階級の諸要因に空想の中で展開を与え、空想の中にその帰趨を求めんとする試みに外ならない。そしてその個性がいかに自由を精神として飛翔しようと、それは市民階級を高らかに象徴しこそすれ、市民階級を越えた実在を反映するものではない。現実の中へ入ってゆき、その槓杆をとらえて現実の關係を変えることなしに、他の方法をもつて自己の脚下にある現実の限界を越えることはできない。レッシングが歴史的社會そのものの内部に、それを底から押し動かす槓杆を弁証し出だし、その槓杆のそれ自身の必然的な動きによつて、現実の歴史の一步一步の中に市民社會を越えた理性の國を開き出だす契機を確定しようとした合理的精神を、シツラーの美的形成の世界に比較せよ。シツラーの道を開いたのはカントであつた。カントは既に理性を実在から切り離し、自由を実在の展開の必然から切り離し、先驗的範疇として自立せしめ、それを実在に對置せしめられた意識主体の根底に置いた。フィヒテはこういう意識主体によつて——驚いたことだが——実在の方を克服しようとした。しかし、そのことによつて彼はシツラーの超然主義を捨て、ドイツ市民階級を叱咤して精神的緊張を与え、國民的獨立を通じて自由をこの市民社會の上に実現せんとする方向へ趨つた。この國民的獨立が何を意味したかは明かである。成程先驗的な自由はナポレオンの支配を脱することで満足させられたが、それとともにライン左岸から来りつつあつた実在上の市民的自由を開くべき契機も同時に喰いとめられた、こういう点でフィヒテはちよつとヒットラーに似ている。否、ヒットラーがフィヒテに似ているのだ。ナチスの哲学が殆んどすべて個性の自覚、先驗的な自由獨立から出發しているのも面白い現象である。実在は克服され得ない。克服されるのは実在から離れ行く定型であり、しかも実在によつて克服されるのである。実在は個々の主体の中に先驗的なものとして開き出されるのではなく、主体の限界を越えた諸主体の相互關

係の中に、即ち歴史社会の歩みの中に、即ち客体の上に開き出されるのである。——この歴史の舞台に理性を開き出すためにヘーゲルが来る。だが、彼は現前のドイツ社会を開き出された理性の国と見た。宗教改革以来ドイツの癌となつて来た諸侯の巨頭プロイセン王に自己の理性を委ねた彼は、ドイツ市民階級の狭少、短見、事大主義をこの点で越え得なかつたことを示している。

とまれ、ある点では、またある限度では理性的であるが、他の点では、またある限度の外では理性を失い、首鼠兩端しゅそりょうたんを持し、権威と伝統にすぎるといふ性情の手の中で理性の最後の仕上げがなされる筈はない。吾々は階級の立場を離れ、人類の全体性、人間社会、歴史の上に立場を移して、その上に顕現し来る實在の真相を限定しなければならぬ。かかる不断に新しい限定の上に進む精神こそは、レッシングを復活せしむべき「第三の人——第三の解放者」の精神である。實在の上に直接燃え上るこの精神の焰は歴史を推動せしめるあらゆる力や集団を照明し、それを働かしめる導きとなるべきものである。この焰は直接實在を燃料として燃え続ける。人類ある限り消えることなき焰である。この焰を受け継ぎ伝え継ぐ人々は一つの使命をもつ。即ち全人類の立場から乖離かいりした何らかの定型に権威を求める立場との、倦うむことなき闘争、これである。これがレッシングの立場である。この立場に立ち得たのは何人であつたか。ニイチェか。

五

トーマス・マンが、一方ではレッシングを常に新しく肉体となつて歩む一典型はじを創めた人として、その典型をミュートス的と限定しながら、他方では、宗教に関するレッシングの見解をあまりにも人間的な一面的な合理主義と考え、その「啓蒙主義」を今日既に古びて、あるより血気溢れる、より深い、より悲劇的な生活概念に席を譲つたものと断定するとき、それはマンが眞のレッシングの合理精神に無縁であつたことを示すものに外ならない。

レッシングにおいて真に今日まで生きているものは彼の合理的精神である。マンは、生けるものは常にミュートス的なものという尺度をレッシングに押し当て、生けるレッシングをミュートス的な形象として描くべく試みた。だが、生けるものはパトスでもなければミュートスでもない。これらを単に象徴として持つところの实在そのものである。实在の生命はニイチエにおける如く或いは衝動として、或いは権力意志として象徴することによつては現實に開き出されるものでなく、それ自身において然かあるものとして認識され、然かあるものとして妥当せしめられるときにのみ現実の上を開き出るのである。

レッシングはミュートス的な形象からはあまりにも遠い批判的反省的形象であつた。

(1) 吉田次郎訳、トーマス・マン「レッシングについて」(プロシヤ芸術アカデミーのレッシング記念講演、ベルリン、一九二九年)、雑誌『カस्ताニエン』(京大独文学会) 第十一号所載。

(2) 栗原佑、高沖陽造訳、『ドイツ古典哲学の進歩性』(改造文庫)、一六一頁。

(3) 「一つの寓話——ハンブルグの牧師ゲッツェ殿への一寸したお願いと然るべき場合の対決状とを添えて」(二七七八)。これはゲッツェに対する最初の論争文である。

上靴を手を持つてとは、よく言われる「ルッターア博士の靴はすべての田舎坊主に合うと限らない」と言う言葉から聯想したのである。

(4) カール・ヴァイトブレヒト「古典作家時代のドイツ文学史」(ゲツシェン叢書)。ヴァイトブレヒトは十九世紀末の一寸名のある作家・文芸学者である。ビスマルクのドイツ帝国統一が生んだ、生粋の独乙的人間で、ゲルマン主義の高唱者。ローマン民族がローマ的ローマ・キリスト教的文化へのいち早い同化から生み出したローマ主義に対し、文学におけるドイツ民族性の勝利を説いた。彼によれば、この勝利の思想は、ワルター・フォン・デア・フォーゲルワイデの唱え出でたもので、ローマ教会と闘争したルツテルは最初にこの方向に巨歩を進め、クロプシュトックからシラーに到る巨匠時代はその宗教改革期の伝統を更新した。しかし、レッシング、ゲーテ、シラーは、そのドイツの人間たる本質にも拘らず一面ローマ主義、即ち古典主義、世界主義への彷徨に陥つていたのである。そのゲルマン主義的反動たるロマンチックも世界観の薄弱と同時に、中世に対するローマ主義的偏見に囚われているが、十九世紀を通じてドイツ国民性の勝利は次第に進みつつある、と。彼が純粹なドイツ国民文学の基礎と考えたビスマルクの統一国家は残念ながら、その意味での見るべき文学を生まなかつたが、現代のナチ文学はワイトブレヒトの予言に深甚の敬意を捧

げるべきであろう。

(5) 「反批判」(一七七七八) 第一節。

(6) 人類の教育、第八十七節の註参照。

(7) 「公理、かかる問題にそのようなものがあるならば」(一七七七八)。ゲッツェに対する第二論争。この命題は既に「ヴォルフエンビツテル叢論」第四冊に現われたものである。「公理」はそれに加えられたゲッツェの論難の反駁である。

(8) 例えばメーリング『ドイツ史』(改造文庫、栗原佑訳)を見よ——「実に我等のこの古典文豪の生涯と経歴こそは、十八世紀の古典文学と哲学と共に、市民階級の社会的解放が、成就の第一歩を踏み出したことを、最も明らかに物語っている」(一一〇頁)。これについて、『フイエ・ツァイト』誌上の次の句を註釈として併記しておく必要がある——「レッシングの事業はブルジョア階級に属するものでなく、プロレタリア階級に属するものである。彼がその利益のために闘ったところの市民階級の中ではこの二つはまだ一身同体であった」(川口浩訳『世界文学と無産階級』叢文閣、二三頁)。但し、この考察の当否はここでは不問に附す。

- 『加藤正著作集』第二巻（「加藤正著作集」刊行委員会、一九九〇年十二月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{d}^{\text{v}}\text{i}^{\text{p}}\text{d}^{\text{f}}\text{m}^{\text{x}}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.ac.uk/hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。